

市岡 卓、『シンガポールのムスリム——
宗教の管理と社会的包摂・排除』明石書店、
2018、386p.

本書は、シンガポールのムスリムが政府および
主流社会との間に抱える問題について、主に2001
年以降に焦点をあてて検討するものである。

本書の構成は以下の通りである。

序章	本研究の概要
第I部	シンガポールの多人種主義とムスリムをとりまく状況
第1章	シンガポールの多人種主義
第2章	シンガポールのムスリムをとりまく状況
第II部	社会的格差、差別、ムスリムとしてのアイデンティティに関わる問題
第3章	社会的格差と差別
第4章	ヒジャブに対する規制と差別
第5章	イスラームの教育・普及をめぐる問題
第III部	過激主義への対応に関わる問題
第6章	過激主義防止対策をめぐる問題
第7章	宗教間の交流と「過激主義」の言説をめぐる問題——ムスリムがクリスマスの挨拶を避けることについて
第8章	民族・宗教間の交流・対話と相互理解をめぐる課題
終章	

序章では、本書の課題と視角および研究方法が説明される。

第I部第1章では、権威主義体制下のシンガポールの多人種主義政策の概要が説明される。シンガポールの人口は、行政上、華人、マレー人、インド人、その他の四つに区切られるエスニック・グループからなる。エスニック・グループは、シンガポールでは一般に「人種」(race)と言及され、固有の文化やアイデンティティを持つと想定される。多人種主義とは、このエスニック・グループないし人種に区切られた国民に平等な地位を与え、というイデオロギーである。しかし、シンガポ

ールにおける多人種主義政策は、差異の承認やマイノリティの保護を通じたエスニック・グループ間の融和という本来の理念を外れ、社会的に構成されたエスニシティ区分に基づいて国民を管理する手法となっている。この社会的に構成されたエスニシティは、政府に承認されたあり方を外れることを認められず、承認されない差異は「脅威」として排除される。

第2章では、シンガポールのムスリムの民族構成と宗教志向の多様性が説明される。ムスリムの宗教実践については、これを支援する制度としてイスラム宗教評議会やムスリム問題担当相といった官製の制度があるものの、これらの制度はムスリムの「包摂」とイスラムの管理を兼ねており、ムスリム社会からは政府の代弁者であるという不満も唱えられている。アイデンティティの表出を抑制する管理のもとで、ムスリムへの支援制度はムスリムを「他者化」し「排除」する仕組みとなっている。

第II部第3章では、ムスリム人口の8割を占めるマレー人が直面する社会的格差と、ステレオタイプ化されたマレー人表象に着目し、格差改善に取り組むマレー人団体と政府との関係から、政府に批判的なリーダー層の発言力が削がれる背景を考察する。華人を多数派とする主流社会には、マレー人への経済的・文化的なステレオタイプにもとづく言説が流布しがちであり、イスラム過激派の脅威が高まった2001年以降は、ヒジャブ(頭髪を覆うスカーフ状の布)を着用するムスリム女性への差別やムスリムが直面するヘイト被害が増加した。マレー人の自助団体のうち、政府主導で設立されたムンダキは、格差改善を優先して差別問題をあからさまに取り上げない傾向が強い。ムスリム知識人協会は、ムンダキやマレー人議員など既存のリーダー層への不満から立ち上げられた経緯があり、財政支援などを通じた政府の管理を受けながらも、比較的自立した立場での発言を維持している。声を上げるべきリーダー層の足並みは揃っておらず、差別や格差の問題は表面化しにくくなっている。

第4章では、2002年と2013～14年に社会的な議論となった公立学校等でのヒジャブ着用規制の

見直しについて、宗教学者・宗教教師の団体ブルガス、官職の宗教指導者ムフティ、ムスリム団体ファテハを中心としたリーダー層の反応を分析する。2002年の議論では、政府による規制徹底の方針を追認したムフティにブルガスが異を唱える局面もあったが、強行論者ファテハと距離を置こうとする動きのなかで議論は沈静化する。2013～14年の議論は、2011年総選挙後のソーシャル・メディア活性化を背景に盛り上がりを見せたものの、首相と対話したブルガス幹部をはじめとするリーダーたちは、漸進的な変化を待つべきとする首相の立場を支持した。強い要求が自制される背景には、格差の改善を優先すべきとする意見と、非ムスリムの間にヒジャブへの偏見や恐れがある状況でヒジャブに固執することでムスリムへの差別感情を悪化させるという懸念とがある。

第5章では、イスラム教育機関であるマドラサへの管理の問題として、格差解消のために世俗科目の導入や学力水準の達成が要件化された1999年の改革による変化を取り上げる。また、2001年の米国同時多発テロ発生の後にブルガスと宗教評議会が進めた「穏健なイスラム」の普及活動を分析する。もとより政府との一体性の強い宗教評議会だけでなく、政府からの財政支援を受けず、比較的独立した立場にあったブルガスが、ムスリム社会と過激主義との結びつきを疑う非ムスリム社会からの信頼回復を求めて政府と協調するなど、2001年以降、リーダー層の立ち位置が国際的なイスラム過激派の活動に影響を受けて変化していることが明らかにされる。一方、政府に阿るリーダー層の動向は、ムスリムの反発を生む結果となっている。

第Ⅲ部第6章では、過激主義に感化されたムスリムに対してブルガスのメンバーやモスク指導者ら宗教リーダーたちが行う「再教育」、および、ムスリム知識人協会やムンダキなどの世俗派リーダーたちが取り組む拘束者家族の生活支援など、過激主義の防止に携わるリーダー層の動きに着目する。シンガポールのムスリムは、テロや過激派を肯定しないものの、テロの背景には「ムスリムへの世界的な抑圧」があると認識しており、この「抑圧」への言及を避けて過激主義の防止に取り

組む動きを、アメリカ主導の「テロとの戦い」に参画する政府の「手先」「傀儡」とみなす見方もある。

第7章では、クリスマスの挨拶をめぐる2016年の論争が取り上げられる。この論争に関して、著者が聴き取りを行ったブルガス幹部、マドラサ教師、宗教評議会メンバー、マレー人自助団体幹部、モスク役員、ビジネスマンなどのリーダー層の間では、ムスリムはクリスマスの挨拶を避けるべきとの考えを批判する意見が多数派だった。背景には、宗教間の積極的な交流を是とするシンガポール社会の元々のあり方と、イスラム過激派への脅威認識のなかでムスリムが差別に晒されることへの懸念がある。他方、リーダー層のこうした姿勢は、政府による宗教管理の強化に正当性を与え、多様な宗教実践を排除することにつながる。

第8章では、2001年以降に促進されている宗教間対話および交流の取組みが取り上げられる。こうした取組みの実態は、各宗教のリーダー層が友好関係を構築することに寄与しているものの、一般の参加者が相互理解を深めるには不十分なものとの指摘がなされる。

終章では、ムスリムの包摂をめぐる問題の一因として、リーダーたちが一枚岩となって異議を唱える状況にないことが指摘される。ここには、リーダーたちに強い異議申し立てを自制させるムスリムの立場の弱さという問題と、リーダーの一部が政府の方針に沿った宗教実践を擁護することで、政府方針から外れる宗教実践が抑圧されるという問題とが含まれている。

本書は、現代シンガポールにおけるムスリム社会が、政府や主流社会との関係で抱える課題と対応を、ムスリム社会のリーダー層に焦点をあてて描くものである。本書で注目すべきは、新聞や政府刊行物に加え、リーダー層への聴き取り調査によって、ムスリム社会の位置づけをめぐる2001年代以降の論争への肉付けと分析がなされている点である。著者が聴き取りを行ったリーダー層は、政治家、マレー人団体幹部、宗教評議会メンバーやモスク役員などの宗教指導者、大学教員やビジネスマン、さらに、非ムスリムの宗教団体幹部や

地域活動家などを含めた計70名にのぼる。幅広い聴き取りの結果、リーダー層の宗教指向や政府との関係の多様さが明らかにされている。

著者は、学歴や社会階層が高くない一般のイスラームの聴き取りを十分に行っていないことを研究の限界と記している。しかし、イスラーム社会の位置づけを検討する上で、政府や主流社会と一般のイスラームとの間を媒介する役割を任じるリーダー層に着目し、その生の声を分析に織り込むことの意義は大きいと思われる。本書で扱われる個別の論争は、表向きには収束していくが、その収束は往々にして政府のシナリオに沿った歯切れの悪いものであり、そのような収束を支えるリーダー層の現状認識と葛藤、そして現実的かつ控えめな形で示される将来への展望は、イスラーム社会の位置づけをめぐる問題が現在進行形のものであることを強く印象づける。

とりわけ2001年以降、イスラーム社会は、政府や華人を多数派とする主流社会から、宗教性の表出と過激主義への傾斜とを結びつける厳しい視線を向けられてきた。このなかで、イスラーム社会を代表し、イスラームが主流社会からの信頼を損なわないよう振る舞おうとするリーダー層の行動と、リーダー層の振る舞いを批判的に見つめ、ときに代表者としての立場を否定する一般のイスラームとリーダー層との葛藤を記録したものとして、本書は十分に意義のある内容を含んでいる。

ただし、課題の設定、重要概念および背景の説明が行われる序章、第1章、第2章には多くの問題と混乱が見られ、論旨の把握を妨げていることは残念に思われる。

まず、シンガポールのイスラームの包摂と排除という問題設定に二重基準とでも言うべき混乱がある。著者は、「シンガポールがマイノリティ（少数者）であるイスラームにとってより包摂的な社会となるための課題を提示する」（p.7）と冒頭で述べる通り、包摂を肯定し、標榜している。一方、研究の視点（pp.12-19）でなされる理論の整理では、包摂と排除が表裏一体の概念であること、包摂それ自体が排除を生み出すことを指摘している。こうした切り口は、包摂を好ましいこととみなす

著者のスタンスを土台から切り崩すものであるにもかかわらず、著者は「多様な議論がある」（p.18）とお茶を濁して済ませている。結果、本論を通して、包摂を標榜する記述と揶揄する記述とが混在してしまっている。

また、著者は、序章においてシンガポールのイスラームをイスラーム・マイノリティと呼び、その包摂と排除を問題とする一般的な議論として、西欧諸国におけるイスラーム移民とその第二世代の社会統合を扱う研究を取り上げている。しかし、分析対象であるシンガポールのイスラームがどのような人々であるのかについてのまとまった記述は、第2章（pp.90-125）に入るまでほとんどなされない。マイノリティと名指される当の人々の顔が見えないままに、イスラーム・マイノリティの包摂と排除という形で問題を一般化して記述を進める姿勢には、シンガポールのイスラームの固有の歴史的経験を等閑視して現代の事象のみを切り取って論じることを可能とする考えがにじむ。シンガポールの独立の経緯を扱う第1章でも、マラヤ連邦を当時まだ存在しない「マレーシア」と言及したり、マレーシアの結成を「マレーシア併合」と述べたりと、歴史記述における先行研究の軽視が目立つ。

シンガポールのイスラームの民族構成を説明する第2章の記述にも疑問が残る。ここでは、マレー人、インド人、アラブ人のイスラームとしての一体感や連帯が強調され、その根拠として、格差に直面するマレー人への支援を行う自助団体や宗教団体の役職者、すなわち本書でいうリーダー層にインド人イスラームやアラブ人イスラームが多いことが挙げられる。記述の全てを否定するわけではないが、イスラーム社会のなかのマレー人と非マレー人との関係、とりわけその階層性の克服は、イスラーム社会の代表性が競われるようになるナショナリズム形成期以降の重要な論点となってきた[Roff 1967]。こうした背景への検証を踏まえずに階層性を度外視することは妥当と言えるだろうか。イスラーム社会におけるリーダー層を主たる分析対象とし、一般のイスラームとの乖離を問題とする本書の論旨に鑑みれば、尚のこと、イスラーム社会の民族関係や社会階層の問題は精査されるべきだったのではないかと思われる。さらに付け加えるならば、

ムスリムの一体性を強調しながらも、インド人ムスリムに次ぐ人口規模をもつ華人ムスリムは、一体性の言及に含められず、他に具体的な説明もなされない。

著者は、リーダー層と一般のムスリムとの乖離の要因として、リーダー層が政府の意向に沿って行動する管理された存在であることを強調する。第3章から第8章までの議論は、取り上げられるトピックや登場する論者の多様さに違えて、一様に管理による多様な宗教実践の排除と、政府側とみなされるリーダーたちの求心力低下（一般ムスリムによるリーダーの排除）という説明が当て嵌められる。1991～93年にかけてのムスリム知識人協会の設立と会長人事の経過（第3章）にみられるように、物言う組織への政府の干渉や、財政支援を通じた管理がなされていることは確かかもしれないが、1990年代の政治や言論状況の説明を2000年代、2010年代の動向にまで当て嵌める議論には些か無理が感じられる。

他方で、本書の議論からは、国際的なイスラム過激派への脅威認識がシンガポール国内で高まった2001年以降、ムスリムを取り巻く環境が変化していることが読み取れる。こう考えると、ヒジャブ着用規制、「穏健なイスラム」教育、過激主義の防止など、本書が取り上げる問題の核心はいずれも、2001年の9.11事件や2002年のバリ島爆弾テロ事件、さらに2014年以降、国際的なテロを扇動した過激派組織「イスラム国」の登場を経て、シンガポールにおけるマイノリティ問題の語りから、「マレー人の問題」から、国際的な言説に結び付けられた「ムスリムの問題」へと転換したことにあったとは言えないだろうか。管理による説明を強調するあまり、この重要な画期への言及が議論としてのまとまりを欠く点は惜まれる。

政府による管理を一貫した筋立てとするには、本書での管理の実態の検証は不十分であり、言説上の管理を本質化していると思われる紋切り型の書き振りが多く見られる。ただし、管理や包摂という言葉への著者のこだわりにも踏み込んで検討すべき意味があるように思う。著者が、上からの管理を否定的に捉えながらも、一足飛びに自由な宗教実践の礼賛へ帰着するのではなく、包摂や承

認といった政府や主流社会との関係を示す言葉にこだわるのは、一方では管理を嫌いながらも、他方で承認を通して社会に位置づけられることを望むという、シンガポールのムスリムが抱える関係のジレンマを著者自身が感じ取っているからではないか。本書の行間には、そうしたジレンマや葛藤を通して、シンガポールでムスリムであることの現代的な意味を掴み取ろうとする苦闘が感じられるのである。

著者がこのテーマに強い思い入れを持っていることは確かであり、リーダー層との関係を活かした研究の今後に期待したい。その際には、お仕着せの表現に依らず、著者自身の言葉で彼らのジレンマを言語化してほしい。

（光成 歩・津田塾大学学芸学部）

参考文献

Roff, William R. 1967. *The Origins of Malay Nationalism*. Kuala Lumpur and Singapore: University of Malaya Press.

中西嘉宏. 『ロヒンギャ危機——「民族浄化」の真相』中公新書, 2021, v+252p.

バングラデシュを研究や支援の対象とするものにとって、ミャンマーの政治研究を専門とする著者による本書の出版は、大きな助けとなっている。

その一番の理由は、「なぜロヒンギャはミャンマーを追われたのか？」という問いに、本書がミャンマー側に視点を置いて専門的に、かつ正面から答えているからである。バングラデシュや南アジア、あるいはNGO活動に軸足を置く評者は、ロヒンギャの人々がバングラデシュ側でどう扱われているか、どう受け止められているかに答えることはできても、彼/彼女の出身地であるミャンマーやラカイン州の事情について正確に答えることはとてもできない。

もう一つの理由は、本書がロヒンギャという集団について、より詳細な説明をしてくれていることだ。ミャンマーの1962年以降の諸政権は、ロヒンギャを今のバングラデシュを含めたベンガル